

●東天に昇る太陽新年の光あまねし仰ぐわれらに
市川茂子
一連タイトルも「光あまねし」。東天に昇る太陽、はやや整理した表現。新年、もそのとおりのものが、上句、こういう端的な言い方もそぐうときがある。

仰ぐわれらに、隣接歌の（初）詣での際の歌だろうか。新年のその時間をともにするよろこび。新鮮で力のある感覚。年の始めのおもいも続かないかもしれない。この（…所に）安くいて、の表現に注目した。安くいて、は、安穩として、安閑としてというくらいの意味か。安は、そのまま不安につづく。晴れの日のつづく所に安くいてそののち冬の嵐あるやも

●羅漢像の供花それぞれ冬ざれの色を保てる景の侘しさ
河村郁子

羅漢像は大抵多いのか、一つでない。それで供花それぞれ。供花を供した人もそれぞれ、なのかもしれない。何の花にしても、いつの花にしても、そのまま冬枯れのなかにある。乾燥しながらもそれなりに色を保つ。何か侘しいものがある。

タイトルの「冬早」の歌、冒頭の歌でもある、

冬ひでり続く境内しんかんと寒の日和を如何にかもせむ

この歌でも、おおよそ上句で尽きている。寒の日和も、要するに冬の姿も、いきついたものなのだ。そ

れでも、みたものを詠うしかない。

●寒鯉は丸太の如き体持ち

谷垣満壽子

これは、十句のうちの最終句。いいさし、文字数も一番少ないが、これで十分。寒鯉のからだのリズム感を云う。丸太の如き、からも思い浮かべるのは真鯉。何か対象物のようにじぶんのからだをみてしまうのは、それが部分部分だからで、鯉は一続き。読みやすい。

枯すすみ木々の名しかと言ひ難し

さいごは、木々の間から空をみるしかない。枯すすみ、は余り読んだことのない表現。今は、葉から識別するとか、幹、また実から識別する、できるといった凶鑑もある。そんな風でも、何の木だろうとは思うのだ。木々は、それぞれ。十句それぞれが、また季節感のあらわれ。

●人の手はありがたきかなひらひらと母を世話する他人の手やさし
布宮慈子

人の手は施設側の人の手、だから他人の手。一連の歌から、お母さんは入院している。ひらひらと、は軽々と、世話をするのに手慣れた人の手の動きのこと。ひらひらと、がいい。

病院の床の上かなし人の世の生老病死みなここにあり

上句、病床ということばを解いた訳ではない。ここでも、人のことを考えている。

一連後ろに、四つ（歳）のきみ、孫の歌がある。きみ、はびつくりしたのだった。その場にいるようだ。なんさい？ ときみがきくから答へたり四つのきみはひつくり返つた

●五位鷺がひとつごかず沼の辺は三人の男それを見て

小野澤繁雄

五位鷺を調べてみる。「コウノトリ目サギ科の鳥。全長60センチメートル内外。頭と背は緑黒色、腹面は汚白色、翼は灰色。繁殖期には後頭から二本の長い白色の飾り羽がたれる。夜行性で、夕方、水辺で魚やカエルを食べる。温帯・熱帯に広く分布。日本では本州以南で繁殖する留鳥。一部は冬に台湾・フィリピンなどに渡る。五位。〔醍醐天皇が神泉苑の御遊のとき、五位を授けた故事によるという〕」(『大辞林』第三版)。シラサギやアオサギのような長い首ではなく、ずんぐりした体。夜行性とあるから、昼間はじつとしているのだろう。掲出歌は、動かない五位鷺をこれまた恐らく動かずに見ている三人の男性を入れて描写した。作者もこの三人の中の一人なのか、かすかなアイロニーも感じさせる。五、一、三を含んだ数詞の使い方もたくみだ。

すすきは足より先にゆくなれどすすき騒いで触れてくるなり

ススキが覆う中を歩くときの様子を「すすき騒いで触れてくる」とうまく表現した。だれもが経験することではあっても、写実としてあらわすのは難しい。ススキが揺れてまたぶつかってくる様子が見えてくるので、ここでは成功しているのではないかと思う。

●淑気満つ天の創りし極相林

新野祐子

極相林とは何か? 「コケ↓一年生の草↓多年生の草↓低木(アオキ等) ↓高木(タブノキ等)」というように、植生は自然のまま放置しておく、群落として生活のパターンをつぎつぎに発達させます。そして最後は、適度の湿り気をもった豊かな土壌の上の木の群落(森林)に落ち着きます。このように生活パターンを変えていく、いわゆる「遷移」(サクセッション)の最終段階のことを、極相(クライマックス)といい、この段階に到達した森林は一応自然の完成した姿といえ、極相林と呼ばれます」(九州環境管理協会、環境関連用語)。長いけれど、この解説でやっとわかったような気がする。

淑気は「新春、四辺に満ちている瑞祥の気」のことで、全体がたいへんに格調高い句である。正月の登山は深い雪の中を進むという厳しい条件ではあるが、それだけに自然とじかに向き合うことができたのだろう。読むほうも精神が洗われるような句が並んでいる。

踏みしめる足裏の雪のほの青く

●あたたかき一月末の昼下り鴨来て金魚の瓶の水飲む

丸山弘子

映画の一シーンのような、輪郭のはっきりした歌である。写実的でありながら、その余韻を味わうことができる。一方、次の歌はどうだろう。

面倒をみて居し最後の野良猫も死にたるといふ さびしと男

「さびし」は、いらぬのではないか。もし実際にそう聞いたにしても、だ。この場面では省略したほうが読み手は素直になれる。前後の歌で年末と推測できるが、この一首だけではわからない。季節感を入れるとか、男を詳しく描写するとか、もう一工夫してはどうだろうか。